

「今」に生きる

Living “Now”

橋本 芙美

Fumi Hashimoto

一般社団法人 SAVE TAKATA / 1982年生まれ。神奈川県出身。京都にて寺めぐり&本の虫生活。京都建築大学校専門課程卒業。

近藤哲雄建築設計事務所を経て、SAVE TAKATAにて若興人の家プロジェクト担当

出身は東北でありながら現在は東京など全国各地で生活されている方々が、さまざまな思いを抱えながら、今ふたたびつながり始めています。市や出身高校のつながりをもとに呼びかけ合うなど、きっかけは「故郷を離れている自分たちでもできること」なのかもしれません。しかし、今「自分たちだからこそできること」とはなんなのか、向き合うときなのではないでしょうか。

私は2012年の春まで建築設計事務所での設計の勉強をしていました。出身は神奈川でこれまで東北とのつながりはほぼなかったと言ってよいと思います。都市の郊外で生まれ育ち、幼いころは子供心に何か論理のようなものがすき間なく地平線のかなたまで続き、そこに自分を受け入れる余地を見つけ難く息苦しさを覚えた記憶があります。建築を学びながら自らの根底に、郊外に住まいながら郊外を好きになれなかった葛藤を抱えていました。震災復興の過程では都市の郊外をコピーするような一方的なシステムでまちがつくられてゆくのだろうか、ひそかに懸念を抱いておりました。そのようななか、若興人の家プロジェクトをきっかけにSAVE TAKATAにコミットすることとなりました。

SAVE TAKATAは、2011年3月11日に発生した東日本大震災および大津波によって甚大な被害を受けた陸前高田市の復興に協力するために、同市出身者が中心となって設立した団体です。地震・津波発生直後、家族の安否を案じ、単身故郷へ戻ろうとしていた数人の元同級

生たちが連絡を取り合っているうちに、「ひとりで行くよりまとまって行こう」「行くなら救援物資が必要だ」と自然にチームが出来上がったのが始まりです。人や情報のネットワークを生かしながら、地域内外をあらゆるかたちで「つなぐ」活動を行いました。桜ライン311の設立・運営支援もそのひとつです。桜ライン311は津波の到達点を後世に伝えるため、桜の木を植えそれらをつないで後世に伝えようという活動ですが、NPO化後もSAVE TAKATAメンバーが副代表兼事務局長として活動支援を実施しています。

震災直後は、高速道路や各店の商品の在庫状況など、地域内外の情報を収集し発信する、いわば陸前高田のハブとローカライズとしての活動がメインであったと言えます。しかし、多くの人とのかかわりのなかで、どこからともなく「こうしたらどうでしょうか」という提案が生まれ、状況に応じたコーディネートを行うようになりました。チームとして走りながら、世代を超えたさまざまな価値観や経歴、理由を持ったメンバーの個性とともにSAVE TAKATAのコンテンツが少しずつ積み重ねられていきました。緊急フェーズがひとまず落ち着いた後も、長期的に陸前高田にて復興活動が続けることをメンバーが強く希望し、「陸前高田に笑顔を創る」という理念のもとに組織としてあらためてひとつにまとまり、ハブとローカライズとしての立ち位置を保ちながら現在まで活動を続けています。

現在SAVE TAKATAが取り組んでいるプロジェクトの



図1 | SAVE TAKATA 活動写真





図2 | 桜ライン311活動写真



ひとつに、「若興人の家／WAKOUDO HOUSE」というものがあります。「若興人の家／WAKOUDO HOUSE」プロジェクトは、陸前高田市鳴石に現存する築60年以上経過した住宅を多くの若者に手伝ってもらい、協力し合って改修するプロジェクトです。また、手伝っていただいた若者のログを残し、記録してゆきます。プロジェクトは、現在SAVE TAKATA、地域支縁団体ARCH、千葉大学大学院森永良丙研究室・小林秀樹研究室との共同で進めており、2013年秋の運営開始を目指し、模索が続いています。

プロジェクトの発端は、地域支縁団体ARCH主催で2012年の4月から全12回で行われた明治大学公開市民講座「復興学・支援学」です。「復興学・支援学」諸回を通し、復興は日本全体の課題であるという意識の共有がなされました。中長期復興段階においてはコミュニティ再生のため、多くの議論、施策の提案・検討がなされますが、そこで浮き彫りになるのは震災以前から地域が抱えていた問題にほかなりません。その実践企画会議に、「復興学・支援学」の第1回講師であったSAVE TAKATA代表理事／CEO佐々木がアドバイザーとして加わり、座学から実践への模索が始まりました。震災直後、多くは「支援」というかたちで生み出された、人と人、コミュニティとコミュニティといった多様なつながり、そしてまた、人々の関心を、いかにして地域の課題、ひいては日本の課題にコミットメントさせることができるか。つくるという行為によって、多くの人を巻き込み、つくりながら、自分たちに何ができるのか、共に考えてゆく。陸前高田へのさまざまな思いを汲みとってゆきながら、自分たちだからこそできるプロジェクトにしてゆければと思っています。

プロジェクトは東京近郊で生活している学生・若者で進められていますが、以前、「地域に根付いたものを提案したい。地域に根付くものでなければ持続的な運営は不可能」「新たな試みを発信すると外部の人が来る。そうすると内部の人は行き辛くなる」といったプロジェクトへの葛藤を抱えた時期がありました。そのような意見に対しSAVE TAKATA佐々木は「高田の課題を考えて楽しくなくなるなら、もう考えなくてよい」と言います。東京に住んだことのある人でなければわからない感覚もある。だからこそ、プロジェクトがそれぞれのキャリアとなるように進めてくればよい。そのような思いでSAVE TAKATAはプロジェクトへ参画しています。

その背景には、Wikipediaなどの陸前高田市人口調査を見てみてもわかるように、陸前高田市には20代の世代が極端に少なく、このままではおじいちゃん・おばあちゃんの街になってしまうのではないかと懸念があります。以前よりまちの若者が少なくなってゆく傾向はありましたが、震災以降さらに拍車がかかり、これからのまちづくりの主体としてまちを支えるはずの世代がまちにいないという状況に陥っています。しかし、まずその当の「若者」に関して、彼らが何を考えているのか、どのような価値観を持っているのか、何を面白いと思うのか、知らなければならないのではないのでしょうか。若興人の家プロジェクトは、SAVE TAKATAにとってそのための調査としての役割も兼ねています。「陸前高田に笑顔を創る」という理念のもと、ここからまた新しいプロジェクトがうまれてほしい。そのような一つひとつのプロジェクトベースの事業をつなげて、SAVE TAKATAは中長期復興の絵を描いてゆければと思っています。



図3 | 若興人の家活動写真